

氏 名	宝 力 嘎
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士 (教育学)
学 位 記 番 号	甲教第 1 号 (文部科学省への報告番号甲第353号)
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位授与年月日	2011年 3 月 2 日
学 位 論 文 題 目	モンゴル民族の教育についての研究 —中国内モンゴル自治区シリングル盟を中心に—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 佐々木 正 昭 (副査) 教 授 清 矢 良 崇 教 授 日 浦 直 美

論文内容の要旨

本論文は、7つの章から構成されており、その前後に序「研究及び調査の概要」と、まとめとしての終章「本研究の特徴ならびに意義と今後の課題」を置く。本論文の中核をなすのは、第1章から第6章で、ここでは第1章でモンゴルの自然、宗教、文化ならびに伝統的な教育についての理論的考察がなされたあと、第2章から第6章で、2008年に内モンゴルシリングル盟において行われた調査結果に基づいて、教育に関わる様々な事柄が考察されている。以下、序、各章の順に内容を要約する。

序「研究及び調査の概要」では、問題の所在と研究の目的、研究対象とした内モンゴルの地域、そして調査の概要を述べている。研究の目的としては、次の4点があげられている。①モンゴル民族固有の自然観、信仰、文化ならびに歴史的人物の箴言及び歴史的人物が受けた家庭教育（しつけ）などを通して、モンゴル民族の伝統的な教育思想を検証し、理論化する。②中国内モンゴル自治区のモンゴル民族小学校において、児童、教師、保護者を対象に現地調査を行うことによって、モンゴル民族の伝統的な教育を実証的に考察する。調査項目は、文化と教育の関係、子どもの生活の実態、しつけや体罰、いじめ問題などである。③中国の対モンゴル民族政策、とりわけ教育関連の政策の歴史と現状を考察することによって、これらの政策がモンゴル民族の教育に与えた影響を検証する。④以上を踏まえて、今日のモンゴル民族の教育上の課題、特に、子ども、保護者、教師に起きている変化や問題を把握すると共に、その解決策を追究する。

第1章「モンゴル放牧文化における教育思想」は理論研究であるが、ここでは、モンゴル民族固有の自然観、信仰、放牧文化における教育思想や子ども観について考察することによって、モンゴル民族の家庭教育の特徴を次の6点にまとめている。①子どもをしつける際に家族全員が役割を分担して関わる。②自然や生態系を守る教えを重視する。③身体の規律化を重視する、つまり、言葉より身体で覚えさせる訓練が重視される。この場合、「身体で覚えさせる」ことは、体罰とは本質的に異なるものである。④子どもの発達段階や発達段階における男女の役割分担を重視する。⑤子どもが一人前になる条件として、「子どもの時期」における「徳育」や「知育」、とりわけ「人間関係」や「忍耐・粘り強さ」が重視される。⑥質素な生活が重視される。つまり、モンゴル放牧文化では「たくさんの金を貯金するより、たくさんの親友を作ること」という人間観があるので、自己中心的、物質中心的な考えを抑制する価値観がある。

第2章の「モンゴル放牧文化において家畜が子どもの心身の発達に及ぼす影響」以降は、調査結果に基づく考察であるが、第2章では、モンゴル放牧文化における家畜の子どもに与える影響を考察し、それを

次の4点にまとめている。①子どもが家畜の世話をすることで、肉体が鍛えられるだけではなく、観察力、集中力、判断力、責任感が養われる。②子どもが汚れた家畜を見て衛生面で気をつけるようになったり、家畜同士のいじめや喧嘩を見て、これらの行為を醜い行為だと捉える気持ちが生まれるなど、家畜との関わりから子どもの社会性や道徳的感情が自然に育成されている。③子どもが、家畜の死（自然死や非自然死）やなついた家畜との別離を悲しむことによって、生命を尊重する心が養われている。④子どもは家畜の行動によって、親への感謝、故郷への愛情など、人間として忘れがちなものを日々喚起されている。

モンゴル放牧文化においては、家畜と人間がこのような関係にあるからこそ、生き物に対する理不尽な行いが抑制されているのである。

第3章「モンゴル民族の家庭における子どもの学習・食生活・遊び」では、今日のモンゴル民族の子どもの家庭での学習時間、学習環境、習い事、食生活、遊び、運動の実態や問題点を次の7点にまとめている。①学習が子どもに大きな負担になっている。②子どもは自らの理想実現のために勉強しているのではなく、親の要請によってしかたなく勉強している傾向がある。③学習環境が整っている子どもとそうでない子どもとに二極化している。④子どもたちの新たな生活空間としての「借家」が増加している。⑤子どもの習い事が過度に増加している。⑥家庭での食事が子ども中心になってきている。⑦今日の子どもの遊びは親の手伝いなどをしながら遊ぶものではなく、特定の場所、時間、遊具、ルールを用いて特定の人との間で行われるマニュアル化された遊びが多くなっている。

以上の調査結果からは、全体的にみれば、今のところは戸外の遊びが盛んに行われているので、これによって子どもの身体と社会性や道徳性が育成されているとみてよいが、家庭での知育の偏重により、勉強や習い事で子どもの生活が多忙になりつつあるゆえに、いつまでこのことが保障されるか、予断を許さないと著者は述べている。

第4章「モンゴル民族の家庭や学校におけるしつけ」では、今日のモンゴル民族の保護者・教師と子どもの関係、大人が子どもを叱る実態ならびにしつけの重点や、保護者のしつけの実態を考察することによって、今日のモンゴル民族の子どものしつけの現状や課題を以下の5点にまとめている。①保護者ならびに教師と子どもは、互いのことをよく理解している。②今日のモンゴル民族の家庭においては、子どもを叱ることは少ないが、叱る時は、父母に限らず家族全員が子どもを叱っており、また父母が叱るときには祖父母が抱き締める役割を持つなど、家族全員が子育てに参加している。③保護者、教師の双方とも子どもを叱る際、「言い聞かせる」という方法がよく使われている。④保護者、教師の双方とも、子どもの道徳面を一番重視している。⑤今日のモンゴル民族の家庭は、子どもをしっかりとしつける家庭と子どもを過保護にする家庭の2種類に分離してきている。

このような考察から著者は、現代ではモンゴル牧畜民の社会にも、子どもに悪影響や危険を及ぼすものが溢れてきているので、保護者が子どもにあまり関わらずとも、子どもが一人前に育った時代は、内モンゴルにおいても終焉を迎えていると述べるのである。

第5章「モンゴル民族の家庭や学校における「体罰（お仕置き）」では、モンゴル文化における体罰にあたる行為や用語を押さえた上で、今日のモンゴル民族の家庭や学校における「体罰」の実態ならびに「体罰」に対する子ども、保護者、教師の考え方や問題点を明らかにしている。その結果、今日のモンゴル民族の家庭や教育現場においては、子どもを叩くこと（「体罰」）はごく普通に行われている。しかし、今日のモンゴル放牧民族の家庭や学校における「体罰」は、その多くが社会通念上許される程度の「お仕置き」であり、実際には、行き過ぎた「体罰」や「児童虐待」の問題は全くと言ってもいいほど見られない。これはモンゴルならではの人間観・子ども観、自然や家畜との共生、家族全員が役割分担して子育てに参加していることなどによるものである。このようにモンゴル民族においては、今なお、子どもの教育に際して「育てること」と「育つこと」、ならびに賞と罰がバランスよく働いている。

第6章「モンゴル人のいじめに対する考え方及び対処法」では、今日の内モンゴルの教育現場におけるいじめの実態、いじめに対する子ども、教師、保護者の考えならびに対処法を明らかにしている。その結果、今日のモンゴル民族の教育現場で起きているいじめには「あだ名をつけられた」などの言葉によるいじめや、「叩かれた」などの暴力的いじめが多く、その構造が単純で深刻、陰湿なものでないことに特徴がある。このような単純ないじめの場合、教師や大人はその実態を把握しやすいはずであるが、内モンゴルにおける人権意識の低さとも関って、教師や保護者はその実態を十分に把握していない。

第7章「モンゴル民族の教育上の課題」では、モンゴル民族の教育上の課題を「中国の対モンゴル民族の言語政策とモンゴル語の現状」「中国の愛国主義教育とモンゴル民族のアイデンティティー」「休牧・禁牧政策とモンゴル民族の教育」「今日の保護者・子ども・教師に起きている変化」といった視点から考察している。このような中国政府のモンゴル民族に対する言語政策、愛国主義教育、休牧・禁牧政策、さらには市場経済に伴う地下資源の開発や都市化などによって、放牧文化が衰退し、その結果、放牧文化を土台にした教育ができなくなってきたこと、その影響で、子ども、保護者、教師の生活が不安定になっている。著者は、これらの政策や傾向がこのまま進めば、内モンゴルにおける放牧文化はやがて消滅し、放牧文化そのものや放牧文化によって生みだされた人間観や子ども観も忘れ去られ、子どもたちは自民族に対する誇りだけではなく、民族のアイデンティティーも失うことになるかと憂慮している。

終章「本研究の特徴ならびに意義と今後の課題」では、研究の特徴を3点あげたうえで、今後の課題を、各章ごと、調査、論文全体のそれぞれについて述べている。

論文審査結果の要旨

宝力嘎氏は、本学の学部時代より、一貫してモンゴル民族の教育、とくにしつけを中心に研究を行ってきた。本論文は、中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の教育についての長年の研究の成果である。

本論文では、モンゴル民族の自然観、信仰、文化、歴史ならびに教育観をおさえたうえで、中国内モンゴル自治区のシリング盟で著者自身が現地で実施した調査結果に基づく考察が中心になっている。調査対象は同地域の小学校21校中、重要な位置を占めている8校に在籍する児童ならびにその保護者と教師である。回答数は児童411名（回収率100%）、教師180名（回収率86%）、保護者283名（回収率92%）である。同地域を調査対象に選んだ理由は、内モンゴル自治区においては、徐々に放牧文化が衰退していくなかで、この地域においては、今なお比較的伝統的な生活と文化ならびに教育が残っているからである。また、調査対象校が8校というのは少ないように思えるかもしれないが、広大な地域に散在している小学校を実際に訪問しての2週間にわたる調査であり、子どもの調査には著者が教室に入って質問紙の項目を読み上げて回答させたり、保護者については識字率が高くないので質問紙を読むことができる保護者を選ぶ作業が必要であったなど、想像以上に大変な作業がされている。また、子ども用、保護者用、教師用の3種の日本語による質問紙の作成と、これらのモンゴル語への翻訳などの準備、ならびにモンゴル語の調査結果の日本語への翻訳と整理などの作業を含めると、この調査には膨大な時間と労力が費やされている。

本研究の評価すべき点は次の通りである。

1 本論文の主目的は、内モンゴルで伝承されてきた子育てに関わる文化的営みを教育学的に捉え直し、その意義を考察することである。そのため、著者は、まずモンゴル民族の自然観、信仰、諺、歴史上の人物の受けた教育等について概観した上で、これまで十分なデータがなかった教育の実践的側面に関する実態調査を行い、その結果を基に、今日のモンゴル民族の教育上の諸問題について考察している。本論文が実態調査だけにとどめず、教育人間学的とでもいうべき理論的考察を行い、この理論的考察と関連づけて

調査を行い、調査結果を分析していることが、本論文の最も特徴的な点であり、論文を意義づけている。

2 本論文は、上述のように周到な準備をした現地調査結果の丁寧な分析に基づく研究であるが、本論文のような内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の教育についての理論的、実証的研究は先例がない。それは現在の中国では、国策に合った教育が称賛されており、教育とはよい学校へ進学させることや教科をいかに上手に教えるかということであって、これ以外の教育、たとえば人格形成などには目が向けられていないからである。この意味において、本論文は、現在の内モンゴル自治区のモンゴル民族の教育の現状と意味を明らかにした貴重な研究であるとともに、モンゴル民族教育についての基礎的研究として今後、継続的にこのような調査をすることによって、データの蓄積を図ることのできるものとなるものである。

3 本論文は、著者が長年日本に滞在して書き上げたものである。著者は、本国から遠く離れて自民族の教育を研究することによって、本国にいただけでは理解できない、自民族の教育の長所と短所を日本の教育と比較しながら客観的に考察した。その意味で、本論文は、著者ならではの視点が随所にみられる興味深い論文になっている。

4 過酷な自然の中での質素な生活は、自然への敬虔な感情と恐れを醸成し、自然と家畜との共生は、自然の一部として謙虚に慎ましく生きる生活の知恵とそれに基づく独特のしつけを生んだ。このような牧畜民の生活や教育は、系統的、意図的、組織的な近代的教育とは異なるものであるため、文明の進展とともに時代遅れとみなされ、これに中国の国策とが拍車をかけてその衰退を招いている。しかし、現代の消費中心の生活が自然の破壊や資源の枯渇を招き、人類の未来に暗い影を落としている現在、モンゴル民族の自然や動物と共生しての環境にやさしい生活や文化は、現代文明への反省を迫るものであり、モンゴル民族の生活様式や生活の知恵とでもいえるべきものを、今後どのように現代生活に生かしていくことができるのかということが全人类的な課題である。本論文は、豊かさと便利さに慣れた現代人への警鐘であるとともに、教育学的には、モンゴル民族の生活信条に基づいて子どもを一人前に育てあげることを目的とした教育的関わりのプロセスを詳細に説明し、その意義を明らかにすることによって、世界の国々へESD (Education for Sustainable Development) の視点からの有意義な提言となっている。

5 最後に、著者が留学生としての様々なハンディキャップを乗り越え、著者にとっては外国語である日本語で、自民族の教育研究領域に、アカデミックな貢献となり得る論文をまとめたことを敬意をもって評価する。

なお、今後の課題として、次の4点が指摘された。

第1に、論文の随所にみられる日本の教育課題（体罰や児童虐待）との比較に関する考察を、日本の現状を示す先行研究を踏まえて、さらに分析、検討されたい。そうすることによって、本論文での主張点がさらに説得力のあるものになるであろう。

第2に、本論文では、モンゴルの伝統的教育実践の意義が強調されているが、実態調査で明らかになった変化と課題について、今後、さらに、調査研究を深めていく必要がある。

第3に、この論文には、モンゴル民族の教育と文化を大切にしたいという意図があるが、これに注目した理由をもっと明確にするとよかったのではないか。

第4に、中国政府との関係は、モンゴル民族の教育をマイノリティ（被抑圧者、少数民族）の教育と捉えることができるが、これは世界的な問題であり、これについては、たくさんの文献や先行研究がある。このような視点も必要なのではないか。

しかし、以上の諸点は、今後の研究課題とみなしうるものであって、本論文の価値を損なうものではない。本審査委員会は、本博士学位申請論文を慎重に審査し、また2011年2月8日に5号館524教室で行った口頭諮問における結果から判断して、宝力嘎氏が博士（教育学）の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達したのでここに報告する。